

## 利休忌茶会で点前を務める

4月に催された利休忌茶会で、薄茶席の点前を務めました。茶席を受け持つ師匠たちと点前を務める弟子たちが利休の画像を掛けた部屋に一堂に会し、お経をあげてから茶会に臨むのが、いつもの茶会と違うところです。

私が受け持ったのが、いわゆるメインゲストの席で、緊張もあったのでしょうか、次客用茶碗を膝前に取り込むときに、茶筌を倒してしまったり、普段しないような失敗をしてしまいました。

あらかじめ心がけていたのが、これ見よがしのきれいな点前は目指すまいということでしたが、技術的にはそれ以前の問題のようです。

さて、おもてなしの心を、ひとが喜ぶのをみて自らも喜ぶことに留まるのではなく、そういう自分を突き放して見る、もうひとつの視点を得ることではないかと、当コラムでのなかで述べたことがありました。見返りを求めぬホスピタリティの精神だけではない、もてなそうとする自分を、一步引いた視点から省みることが必要なのではないかと。道元禅師の説く「大心」のところが、まさにそのようなものだ、なども述べました。

それでは、どうやってその「一步引いた視点」を取り入れることができるのでしょうか。せっかく貴重な経験をさせてもらったので、これに関して感じたことを、思いつくまま披露させていただきます。

たとえば、桜の花は毎年同じように咲いて私たちを楽しませてくれますが、けっして「同じかたちに」咲くことはしません。枝ぶりも蕾の位置も、花びらの重なり方も全く異なるにも関わらず、昨年と同じような感動をもたらしてくれます。昨年と「同じかたち」を目指すのならば造花と同じでしょう。「これ見よがしのきれいな点前」は造花のようなものだと思います。

去年もおととしも、その前の年も花を咲かせたことを桜の木が覚えていて、そのうえで、今年ならではの花を咲かせようとする、それが「一步引いた視点」につながるのではないかと考えました。

### ■ 震える弱いアンテナ

そう考えたのも、茨木のり子さんの作品のなかで、私の最も好きな『汲む』という詩を思い浮かべたからです。若い詩人が、年配の人から語りかけられた言葉が、折に触れ思い起こされて、その思いを汲むようにしているという詩です。

詩の本来の魅力を減じてしまうことを恐れながら、抜粋したものを紹介します。

汲む ―Y・Yに― (茨木のり子『鎮魂歌』より)

\*\*\*\*\*

そのひとは私の背のびを見すかしたように  
なにげない話に言いました  
初々しさが大切な  
人に対しても世の中に対しても  
人を人とも思わなくなったとき  
墮落が始まるのね 墮ちてゆくのを  
隠そうとしても 隠せなくなった人を何人も見ました

\*\*\*\*\*

年老いても咲きたての薔薇 柔らかく  
外にむかってひらかれるのこそ難しい  
あらゆる仕事  
すべてのいい仕事の核には  
震える弱いアンテナが隠されている きっと……  
わたくしもかつてのあのと同じぐらいの年になりました  
たちかえり  
今もときどきその意味を  
ひっそり汲むことがあるのです

さて無粋を承知で、さきほど述べかけた「おもてなし」の話に繋げて考えてみます。

初々しさがなくなるとき、人を人とも思わなくなるとき、それは物事をルーティンで片付けようとするようになったとき、と言い換えることができると思います。どんなにホスピタリティに基づいた行動でも、ルーティンになり得ます。

「柔らかく／外にむかってひらかれるのこそ難しい」咲きたての薔薇は、いつも厳しい自戒のもとに開くのではないのでしょうか。そうすると、すべてのいい仕事の核であるという「震える弱いアンテナ」は、墮ちてゆくのを隠せなくなった人を何人も見たからこそ、自戒の末に得られるものではないのでしょうか。

若い詩人に語りかけた言葉もおそらく、自戒の末に思わず口をついて出たものに違いない、けっして押しつけがましいものではなかっただろうと思います。そして、先に述べた「一步引いた視点」は、この自戒を基点とする視点に近いのではないかと思うのです。

みずからの拙い点前を振り返って、そんなとりとめのないことを考えました。

(所長 瀬戸 英晴)